

新風

フェンシングとDX

日本銀行新潟支店長

東 善明



最近、信濃川沿いを走ったり弥彦山に登ったりと、新潟の素晴らしい自然を満喫している。久しぶりの運動だが、もともと体を動かすのは嫌いではなく、そういえば大学ではフェンシングに夢中だった。

フェンシングには剣やルール異なる3種目がある。このうちエペとフルーレは私が生まれる前から電氣化されていたが、これに続くものとして、私の現役時代にサーブルが電氣化されることとなった。

これは今でいうDXに相当する大事件だった。まず、電氣審判器やセンサー付きの電氣剣、金属製マスクの導入費用が高くついた。だが、客観的な判定は試合の公正性を高め、審判員への大仰なアピールが激減し、試合時間は短くなった。そして、選手達のプレー・スタイルも変わり始めた。人の目では判定が難しかった手首への攻撃が増えたり、センサーの反応が鈍いと判明した突き技が回避されたりした。新ルールを意識した戦略が次々に試され、ゲームに新たな面白さが加わった。

ただし、審判の電氣化が常に有益とは限らない。例えばフェンシングと剣道は似ているが、勝利の価値基準が異なる。貴族の決闘は、一滴でも先に血

が滲めば即座に負けとなる「名誉」の勝負だった。その名残で今でもユニフォームは白く、エペ競技では相手のつま先でも背中でも、とにかく1/25秒以上の差で先に突けばポイントとなる。一方、剣道では、防具の特定個所を正確に、かつ残心を持って打突しないと一本は取れない。これは憶測だが、剣道が電氣化されない背景には、「残心」と呼ばれる選手の心身状態を評価することの難しさがあるのかもしれない。

さて、DXが新潟経済の一段の活性化に資する手段であることに疑いはない。DXを有効に活用するには、具体的な課題や費用対効果をしっかり見定めるだけでなく、守るべき「勝利の価値基準」——利益の最大化、家業の継続、従業員の働き甲斐、地域への貢献など——を改めて見極めておくことも大切かと思う。

PROFILE

東 善明 (あずま よしあき)

昭和45年生(石川県出身)。平成6年日本銀行入行。金融市場局市場企画課長、同局総務課長、北京事務所長を経て令和3年1月現職。